麦穂だより

第２号　２００２年７月発行　発行　武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎支部
事務局　川崎市麻生区白鳥３－１３－３　北條鈴子 ℡０４４－９８７－９１４９

かかあ天下　とうどん

大河原　美春

〔上毛三山を望む農林６１号の小麦の田園風景〕

昨秋種まきした農林６１号の小麦が実り、６月９日、１０日の２日間麦刈りをしました。見わたすかぎり、どこの田んぼも農林６１号の麦穂です。自分で蒔いた小麦を収穫し、「挽きたて、打ちたて、茹でたて」の三たての手打ちうどんがもうすぐ食べられると思うと、心がはずみ、２日間の麦刈りも、上毛三山を眺めながら、楽しくルンルン気分で終ることができました。

今どきの麦刈りは、トラクターであっと言う間に刈り取りをします。トラクターで麦刈りをしながら、同時進行でトラクター内で脱穀が行われ、見る見るうちに小麦の粒になって出てくるのです。

その日は元気な９３歳の母を頭に私も姪や甥と一緒に家族総動員で麦刈りの手伝いです。

私達は、家を継ぐ弟が運転するトラクターが田んぼに入りやすいようにその部分だけ麦を刈ったり、トラクターが刈れない部分のまわり刈りをするのです。トラクターの動きの早さに追いたてられながら約１町歩（１０反）の麦刈りの手伝いをし、心地良い汗を流すことができました。

（次ページにつづく）

（前頁より「かかあ天下」とうどん
大河美春）

夕方、田んぼから帰ると弟の嫁さんが手打ちうどんを打っていました。麦刈りが終わったから、今日はお祝いよ」と声をはずませながら麺台の上で丸い麺玉を押しのばし、弾む庖丁、駒音たてて、トントン・トントン、喜びのリズムが伝わってきました。

関東地方の山林では、祭りや祝い事の膳には、必ずうどんと赤飯が決りです。うどんはお祭りの主役だけでなく、毎日の食膳に欠かせない重要な役割を果してきました。私の子どもの頃のうどん打ちは、女たちの仕事と考えられて、洗濯と並んで誰でもできました。それほど当り前に思われていたので、うどん打ちのできない娘は、嫁入り前にわざわざうどん打ちを習ったものです。乾麺が普及する以前は、どこの家庭でも自家でうどんを打ったものでトントンと食欲をかりたてる音を隣り近所へ響かせて麺作りが始まると、「今夜は隣りんちはうどんだな・・」と、麺板の響きで急に空腹を感じて、腹の虫が鳴き出したりしました。安価な自家製うどんで隣り近所が招き合ったなごやかな頃がありました。

この地方では、うどんの打てる嫁が要求され、それが嫁入り資格のひとつでもありました。それほど麺類が一般家庭の食生活に重要視されていたのです。

麺づくりと同じように機織りも嫁入り資格で、機織りの上手な女性は貴重がられ、機織りの盛んな上州には「かかあ天下と空っ風」の俚諺があります。

女性関白や女尊男卑の意味ではなくて女性の収入の大きいことを謳歌したものだと言われています。要は、おらがかかあは、天下一の働き者で、うどん作りは天下一だよという意味だそうです。従って上州はうどんのおいしい土地として知られているのです。我が家の嫁さんも手打ちうどん作りの名人で、その日は天下一の手打ちうどんと赤飯で、麦刈りのお祝いの膳を囲みました。

武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎支部
平成１４年度定期総会を開催

今年６月は、ワールド・カップ戦に明け暮れたサッカー月間でした。

真夏日を思わせる、快晴に恵まれた５月１９日（日）大安吉日。午前１１時から向河原駅近くの「宝珍楼」で、定期総会・記念講演、懇親会を行いました。

当日は、本部から会長、福田氏、宮崎氏、原氏が出席。来賓として、川崎市長、川崎市議会副議長も臨席されました。

＊　＊　＊　＊　＊

加藤会長から、

・うどんのおいしさより、作り味わう楽しさを
・おいしいうどん作りはまごころが第一
・川崎の新しい食文化よ永遠に

のメッセージを力強く受けとめ、

阿部市長からは、「民間ベースで文化イベントに取り組むことは大歓迎。武蔵野手打ちうどんを川崎文化の一つとして益々広げていってほしい」との御祝辞を、 菅原副議長からも「食物の安全と伝統を守るためにも 、うどんを皆で打つことは楽しい。できあがったうどんを家族で味わい、あるいはごちそうしながら、地域に和が広がっていくことを期待したい」と励ましのお言葉をいただきました。

第一部の総会では、議案もすべて承認され、役員の補充については新たに若手幹事として、太田信也、村田芳包、細田俊介の３氏が承認されました。

第二部、うどん博士加藤有次先生による記念講演では、うどんに関する縦横無尽で有意義な講話の後、今年度は五島列島でのうどん交流会の企画、来年度はスポンサーを確保して、ローマのパスタと武蔵野手打ちうどんとの競演予定等、夢は大きくかけめぐり、会場に笑いと興奮をまきおこした１時間余の熱演ぶりでした。

第三部の懇親会は、大河原会計監査の名司会により自己紹介はもとより、うどんへの熱い思いを語り合う和気あいあいの雰囲気に終始し、名残を惜しみつつ、予定時間をはるかに超過して散会となりました。

当日は早朝から会場オーナーでいらっしゃる深沢さんに、看板書き、会場設営、器材提供と、微に入り細に入りのご指導とご協力をいただきましたことに深く感謝しております。

会　員　募　集

うどん好きあつまれ！！

入会希望の方には、会費を添えて事務局にお申込みください。

武蔵野手打ちうどんは古来より武蔵野台地に伝えられたうどんです。

川崎市は南武蔵にあたり武蔵のつく駅名もたくさんあります。その川崎に“うどん会”が発足しました。

会長はうどん博士（國學院大學教授・川崎市市民ミュージアム館長）加藤有次先生です。
会長を中心に、手打ちうどんの保存、普及のために活動しています。手打ちうどんで“和と輪”のネットワーク作りを目指しています。

○武蔵野手打ちうどん保存普及会川崎支部はこんな活動をしていきます。

・うどんづくり講習会　・うどんを訪ねてバス親睦旅行　・会報の発行　等

○お申込み、お問い合わせは事務局までご連絡下さい。（会費　月４００円）

事務局　〒215-0024　神奈川県川崎市麻生区白鳥３－１３－３
TEL/Fax　０４４－９８７－９１４９
北條鈴子　e-mail　reko1616@hotomail.com

武蔵野手打ちうどん保存普及会

川崎支部活動報告（前号以降）

２００２年３月２３日　第２回支部講習会事前準備
（本部より器材借用、粉等材料購入）
３月２４日　第２回支部講習会
（参加者　午前２５名　午後３０名）
指導者　本部　福田さん他３人
４月１７日　第４回支部役員会
（平成１４年度総会に向けて）
４月２１日　本部講習会実施
５月１６日　会計監査実施
５月１９日　平成１４年度総会・懇親会
会場；宝珍楼
時間；１１時～１４時３０分
記念講演「武蔵野手打ちうどん１５年ーそしてこれから」
講師　加藤有次会長
参加者；約７０人
６月　６日　平成１４年度第１回支部役員会
６月３０日　本部講習会実施（３名参加）
７月　７日　第３回支部講習会

第２回うどん作り講習会開催さる

さる３月24日（日）、本部から３名の指導者を招き、市立高津高等学校食堂にて第２回目のうどん作り講習会が開催されました。午前９時30分～12時と午後１時30分～４時の２回に分け、スタッフを入れ約70名（参加者55名）の参加がありました。打ったうどんをおみやげに、皆さん楽しげに家路につかれました。

川崎支部第２回講習会に参加して

吉井　孝大

麺好きを自認する私ですが、特に「うどん」には思い入れがあります。

そもそも、私は、川崎市内で育ちましたが、生まれは、会長の加藤先生が設立総会の記念講演でもお話されたとおり、小麦粉食文化圏の一つである武蔵野の北の端に位置する群馬県の片田舎です。

母の実家は、農家でしたので比較的広いスペースがあることと、また、我が家の生活状況を反映して、夏休みの手軽なレジャーと言えば、家族全員で行く田舎での数日の宿泊旅行であり、これが私の小学校高学年までの毎年の恒例となっていました。

〔第２回講習会の様子〕

当時は、昭和 20 年代の後半から昭和 30 年代の前半、まだまだ豊かさには程遠い時代でもありますし、夏の農繁期ですので、それこそ唯一のご馳走は、祖母や伯母が農作業の合間に打つ太めでやや色黒の「うどん」（子ども達は、めんめと呼んでいた。）と、それに添えられた「野菜の天ぷら」、薬味の「みようが」や「ねぎ」など、素朴なものでしたが、私の兄弟や従兄弟と競って食べたことを今でも鮮明に思い出します。

また、母は、高齢のため、今でこそ「うどん」を打つことはありませんが、来客の折りや我々のリクエストに応じて、習い覚えた腕前を発揮することがあり、それが私の麺好きの原点ではないかと思っています。

そんな経験の中で、機会があれば母から「うどん」打ちを習いたいと願いつつ、身近であるが故にそれが適わなかった訳ですが、川崎の「うどん」好きの方々が支部を立ち上げられるとの情報を得、また、知人のすすめもあり、今がチャンスとばかり入会しました。

肝心の「うどん」打ちについては、今年の３月の講習会で実現し、粉まみれになりながら指導員の適切な指導をいただき、何とか仕上げることができました。考えた以上に手間と技術を要するものと実感し、それだけに、何よりも回数を重ね経験を積むことの重要性を認識したところです。

母から譲り受けた「麺棒」、以外の道具を揃え、先ずは、家族に振舞える「うどん」作りを目指し、一会員として楽しみながら長く続けていきたいと思いますので、今後とも、宜しくご指導をお願いします。

あとがき

第３回講習会の日に「麦穂だより」第２号を間に合わせたいと、気持ちは焦りつつ、肝心の頭と手が全く作動しないで、今回も強行日程の突破に巻添えを強いてしまいました。総会が始まって、「カメラがない」「テープ忘れた」と気づく始末。でも今号には、おふたりからすばらしい原稿を寄せていただいて、発行にこぎつけることが出来ました。

３号は、早くから準備にかかり、余裕をもって発行するつもりですが、どうなりますことやら・・・。